

■ 概況

2/6~2/12のNYMEX・WTIは、49.57~51.17ドルの範囲で推移した。

2月13日は、OPECプラスの現行協調減産の拡大への期待から、3日続伸した。ただ、国際エネルギー機関(IEA)月報の2020年第1四半期の需要の10年超ぶりの前年同期比減少、20年通年の需要見通しの下方修正の発表が、上値を抑えた。3月限終値は前日比0.25ドル高の51.42ドル。

週末14日は、ブルイェット米エネルギー長官が、新型肺炎によるエネルギー市場への影響はわずかと発言するなど、新型肺炎拡大による世界経済への過度の懸念が後退し、4日続伸した。ペーカーヒューズ社発表の米国稼働石油掘削機は678基と前週比2基増と2週連続の増加だった。3月限終値は前日比0.63ドル高の52.05ドル。

17日は、プレジデントデー(ジョージ・ワシントン誕生日)で休場。

連休明けの18日は、引き続き、新型肺炎の感染拡大の影響の世界経済停滞懸念がくすぶる中、連休明けの安値拾いや持ち高調整の買いも入り、横ばいとなった。3月限終値は前週末比横ばいの52.05ドル。

19日は、前日に続き、新型コロナウイルスによる肺炎の世界経済への過度な影響懸念が後退し、上伸した。米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報の発表は、連休のため翌日の発表予定。3月限の終値は前日比1.24ドル高の53.29ドル。

アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(4月渡し)は2月6日~12日の間53.90~56.00ドルの範囲で推移した。2月13日55.10ドル、14日55.50ドル、17日55.70ドル、18日55.70ドル、19日56.70ドルで推移した。

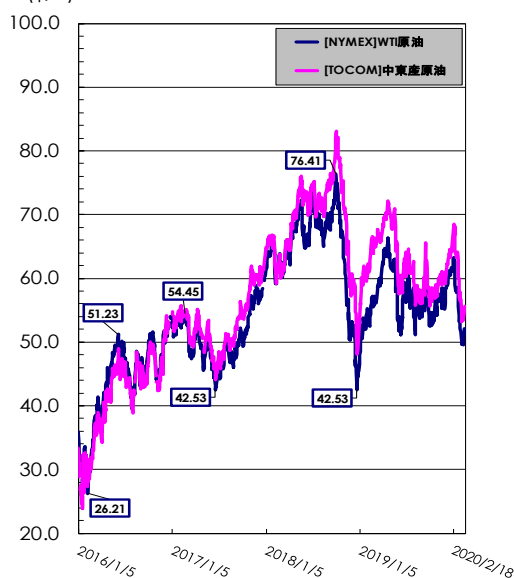
為替は2月6日~12日の間109.67~109.92円の範囲で推移した。2月13日109.91円、14日109.89円、17日109.80円、18日109.86円、19日109.94円で推移した。

財務省が2月19日に発表した貿易統計(速報・旬間)によると、1月下旬の原油輸入平均CIF価格は、48,729円/klで、前旬比58円高、ドル建て70.82ドルで前旬比0.13ドル安。為替レートは1ドル/109.39。また、同日発表の貿易統計(速報・旬間)によると、1月の原油輸入平均CIF価格は、48,317円/klで、前月比2,322円高、ドル建て70.27ドルで前月比3.15ドル高。為替レートは1ドル/109.31。

そのような中で、2月17日時点の小売価格は、ガソリンが前週比1.5円の値下がり、軽油も同1.5円の値下がり、灯油は同18円の値下がり(18%ベース)だった。ガソリンは4週連続の値下がり、軽油は3週連続の値下がり、灯油も3週連続の値下がりだった。この週(2月第3週)の原油コストは値上がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに全社0.5円値上げとなった。

原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	2/9 ~ 2/15	3,188 ▼ -39	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	81.4 ▼ -1.0	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	2/15	10,947 ▲ 163	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	2/17	55.65 ▲ 2.27	▼ -10.5
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	2/18	52.05 ▲ 2.48	▼ -4.0
	原油CIF単価 (\$/bbl)	1月下旬	70.82 ▼ -0.13	▲ 8.14
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	48,729 ▲ 58	▲ 5,619
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	109.39 ▼ -0.34	▼ -0.04
	外国為替TTSレート (¥/\$)	2/17	110.80 ▼ -0.13	▲ 0.74

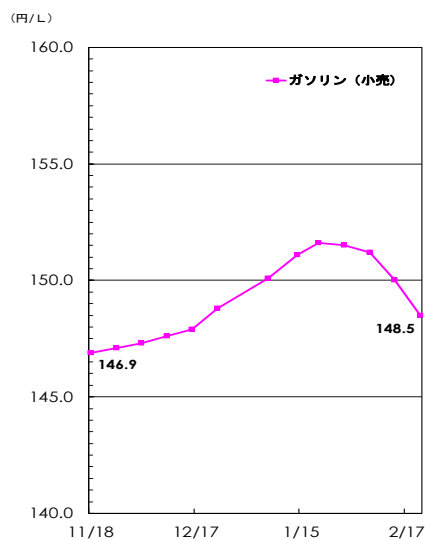
(\$/b)



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/9 ~ 2/15	887 ▼ -91	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	878 ▼ -79	▲ -	
	輸出	"	112 ▲ 65	▼ -	
	在庫	2/15	1,683 ▼ -102	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/11 ~ 2/17	53.8 ▼ -1.1	▼ -3.1	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/11 ~ 2/17	52.3 ▲ 1.0	▼ -2.8
		(TOCOM/中部)	2/17	54.2 ▲ 0.2	▼ -3.6
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/17	148.5 ▼ -1.5	▲ 5.5	

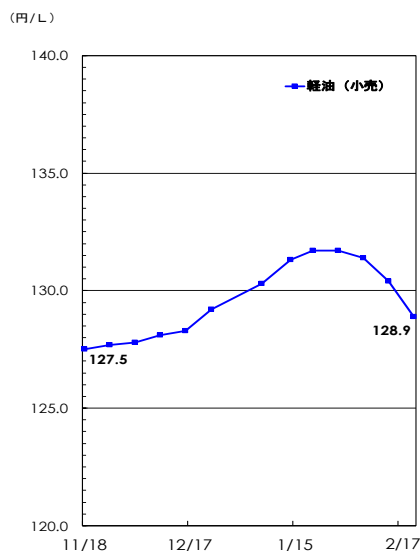
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

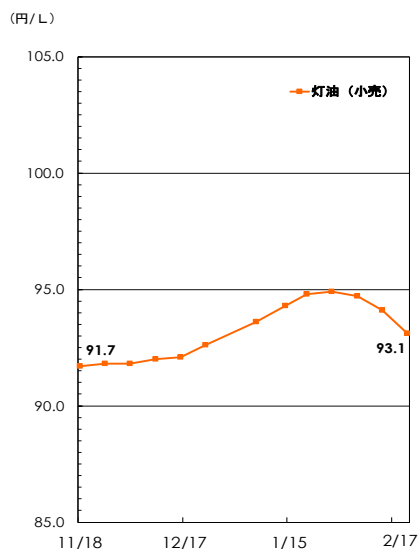
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/9 ~ 2/15	718 ▼ -52	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	582 ▼ -66	▼ -	
	輸出	"	195 ▲ 78	▲ -	
	在庫	2/15	1,614 ▼ -59	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/11 ~ 2/17	58.0 ▼ -2.4	▼ -2.4	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/11 ~ 2/17	61.9 ▼ -0.5	▼ -0.5
		(TOCOM/中部)	2/17	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/17	128.9 ▼ -1.5	▲ 4.7	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/9 ~ 2/15	302 ▲ 26	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	404 ▼ -10	▼ -	
	輸出	"	0 ➡ 0	➡ -	
	在庫	2/15	1,799 ▼ -102	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/11 ~ 2/17	57.3 ▼ -1.3	▼ -2.7	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/11 ~ 2/17	54.6 ▲ 1.2	▼ -4.8
		(TOCOM/中部)	2/17	56.7 ▼ -0.3	▼ -3.8
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/17	93.1 ▼ -1.0	▲ 4.4	



■ 関連情報

1 海外/原油

2月19日のNYMEX市場WTI原油は、前日に続き、中国で新型コロナウイルスによる肺炎の死者・感染者の増加が抑えられるなど、新型肺炎の世界経済への過度な影響懸念が後退し、上伸した。欧米株価も全面高で、投資家のリスク選好姿勢が幾分戻った。次の市場の注目は、連休で一日遅れとなる翌日の米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報の発表で、市場予想は、原油在庫が前週比250万バレル増、ガソリンも積み増し、中間留分は取り崩しの見通しとなっている。3月限の終値は前日比1.24ドル高の53.29ドル、4月限の終値は同1.20ドル高の53.49ドル。

EIAによると、2月17日時点のガソリンの小売価格は、前週比0.9セント値上がりの1ガロン2.428ドル(71.0円/ℓ)、ディーゼルは同2.0セント値下がりの2.890ドル(84.5円/ℓ)となった。ガソリンは6週ぶりの値上がり、ディーゼルは6週連続の値下がりがだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2020年2月9日～2月15日に休止したトッパー能力は24.2万バレル/日で、前週に対して5.5万バレル/日減少した(全処理能力は351.9万バレル/日)。原油処理量は318.8万klと、前週に比べ3.9万kl減少。前年に対しては39.4万klの減少。トッパー稼働率は81.4%と前週に対して1.0ポイントの減少、前年に対しては10.1ポイントの減少となった。

生産は前週に比べて灯油が増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリン/9.3%減、ジェット/33.3%減、灯油/9.5%増、軽油/6.8%減、A重油/7.0%減、C重油/16.2%減。今週のC重油の輸入は3.6万kl(前週比3.6万kl増)。軽油の輸出は19.5万kl(前週比7.8万kl増)。

出荷(輸入分を除く)は前週比で全ての油種で減少となった。前年比ではガソリンが増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は87.8万kl(対前週8.3%減)と2週振りで減少となり、26週連続で100万klを下回った。ジェット1.7万kl(対前週89.2%減)、灯油40.4万kl(対前週2.6%減)、軽油58.2万kl(対前週10.1%減)、A重油20.3万kl(対前週25.7%減)、C重油8.6万kl(対前週42.8%減)。

(単位:千KL)

	今週 (2/9 ~ 2/15)	前週 (2/2 ~ 2/8)	前週比
ガソリン	878	957	▼ -79 (-8%)
ジェット燃料	17	157	▼ -140 (-89%)
灯油	404	414	▼ -10 (-2%)
軽油	582	648	▼ -66 (-10%)
A重油	203	274	▼ -71 (-26%)
C重油	86	151	▼ -65 (-43%)
合計	2,170	2,601	▼ -431 (-17%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

2月15日時点の在庫は、ジェットで積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。前年に対してはジェットと灯油で増加となり、その他の油種で減少となった。

ガソリンは168.3万kl、前週差10.2万kl減。前年に対しては5.5万kl少ない。

灯油は179.9万kl、前週差10.2万kl減。前年に対しては6.6万kl多い。

軽油は161.4万kl、前週差5.9万kl減。前年に対しては0.6万kl少ない。

A重油は72.8万kl、前週差0.8万kl減。前年に対しては8.9万kl少ない。

C重油は190.5万kl、前週差1.7万kl減。前年に対しては7.4万kl少ない。

(単位:千KL)

	今週 (2/15)	前週 (2/8)	前週比
ガソリン	1,683	1,785	▼ -102 (-6%)
ジェット燃料	849	820	▲ 29 (4%)
灯油	1,799	1,901	▼ -102 (-5%)
軽油	1,614	1,673	▼ -59 (-4%)
A重油	728	736	▼ -8 (-1%)
C重油	1,905	1,922	▼ -17 (-1%)
合計	8,578	8,837	▼ -259 (-2.9%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

2月11日～17日の原油価格は、前週比で値上がりし、為替も円安で、原油コストは値上がりしたものと見られる。

陸上スポット価格は、2月11日～17日の間、ガソリン107～108円台で値上がり、軽油57～58円台でわずかに値下がり、灯油57円台でほぼ横ばいで推移した。

海上スポット価格は、同期間で、ガソリン109～110円台で値上がり、軽油59円台でほぼ横ばい、灯油55～56円台で大きく値上がりして推移した。

先物価格は、同期間で、ガソリン104～107円台で大きく

値上がり、軽油61～62円台で値上がり、灯油53～55円台で値上がりして推移した。

次週の元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、全社0.5円の値下げとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

2月11日～17日の製品スポット市況は、2月4日～10日平均と比べ、先物のガソリンと灯油を除き、他の油種・取引で値下がりした。

直近の陸上スポット価格(2/11～2/17、千葉・川崎・中京・阪神の4地区の陸上ラック価格平均値)は、前週比で、ガソリンは1.1円の値下がり、灯油は1.3円の値下がり、軽油は2.4円の値下がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、前週比で、ガソリンは1.7円の値下がり、灯油は0.1円の値下がり、軽油は3.1円の値下がりだった。

先物価格は、前週比で、ガソリンが1.0円の値上がり、灯油は1.2円の値上がり、軽油は0.5円の値下がりだった。

2月第4週の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社0.5円の値上げになった。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー4地区平均]	今週 (2/11～2/17)	前週 (2/4～2/10)	前週比
レギュラー	53.8	54.9	▼ -1.1
灯油	57.3	58.6	▼ -1.3
軽油	58.0	60.4	▼ -2.4

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値] [平均]	今週 (2/11～2/17)	前週 (2/4～2/10)	前週比
レギュラー	52.3	51.3	▲ 1.0
灯油	54.6	53.4	▲ 1.2
軽油	61.9	62.4	▼ -0.5

※上記価格は税抜き価格

参考値 (2/11～2/17実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▼ -1.1	▲ 1.0	⇒ 0.0
灯油	▼ -1.3	▲ 1.2	⇒ 0.0
軽油	▼ -2.4	▼ -0.5	▼ -1.4
A重油	▼ -2.9		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

2月17日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前回比1.5円安の148.5円、軽油も同1.5円安の128.9円、灯油は18%ベースで同18円安の1,675円(1%ベースでは同1.0円安の93.1円)。

ガソリンは4週連続の値下がり、軽油は3週連続の値下がり、灯油も3週連続の値下がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりはなし、横ばいが1県、値下がり46都道府県となった。全国最安値は埼玉県の142.8円(同2.2円安)、その次に安いのは石川県の143.1円(同1.9円安)、最高値は長崎県の161.2円(同1.6円安)。横ばいは高知県、最も値下がりしたのは同3.6円安の香川県(147.2円)だった。

先週の原油コストは大きく値下がりし、今週適用の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社2.5円の値下げとなった。今週は、原油価格は値上がりし、為替レートもわずかに円安で、原油コストは値上がりした。次週適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社0.5円の値上げとなった。次回調査時(2月25日)のガソリン・灯油の小売価格は、前週までの卸価格値下げの転嫁が遅れていることから、小幅な値下がりが見込まれる。

(単位: 円/%)

(資工庁公表) [週動向]	今週 (2/17)	前週 (2/10)	前週比	直近高値
レギュラー	148.5	150.0	▼ -1.5	08/8/4 185.1
灯油	93.1	94.1	▼ -1.0	08/8/11 132.1
軽油	128.9	130.4	▼ -1.5	08/8/4 167.4

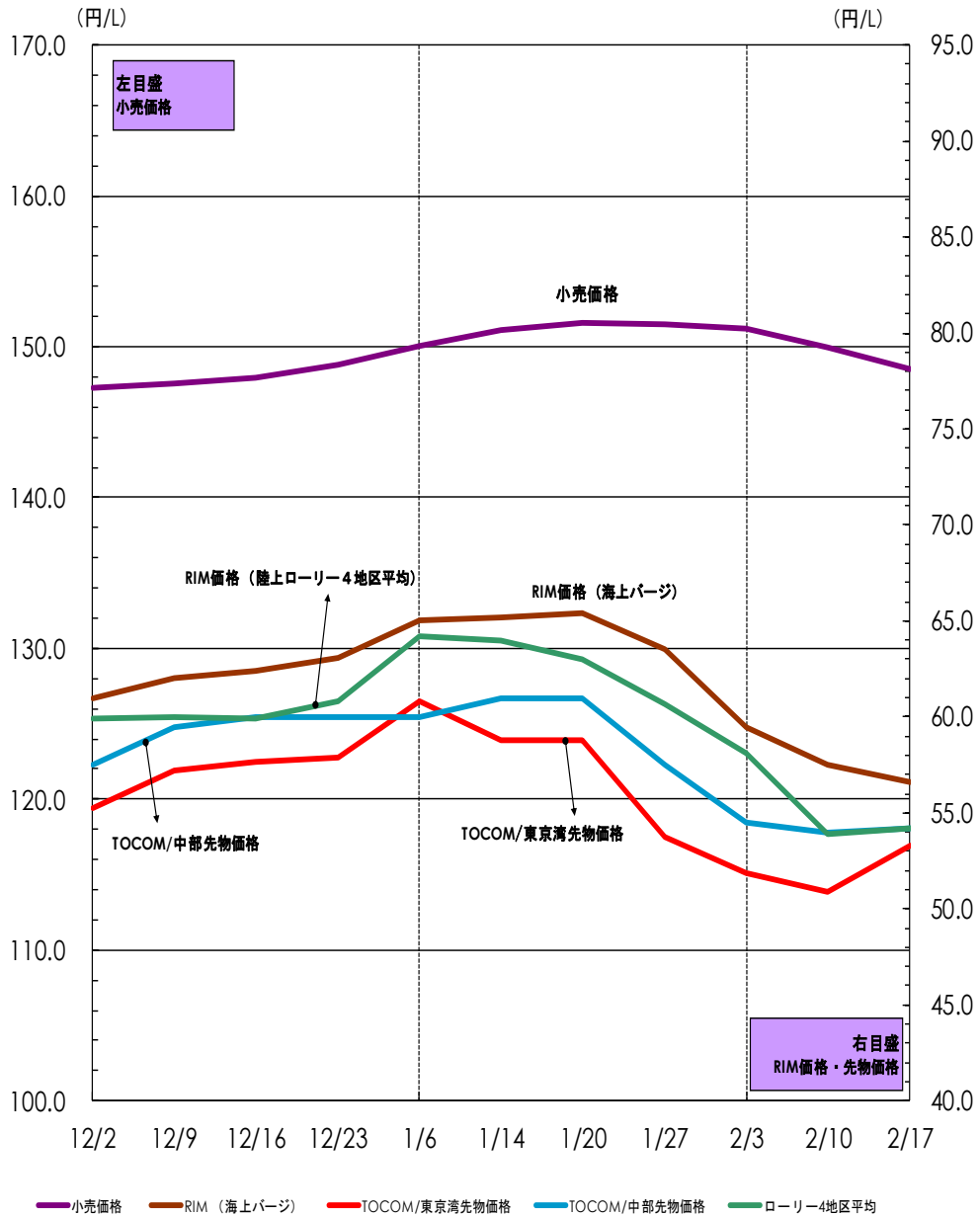
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2019/12/2 ~ 2020/2/17)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2019第45号)の公表は、2/28(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(令和元年9月末現在)は、12月25日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM (Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁-HPIに掲載)。